

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信

【581】

埼玉大学・理工学研究の現場

この記事の執筆を始めた折、「先生の講義がベストティーチャー賞を受賞しました」との一報を受けた。確かに、昨年度の受講生さんからの講義アンケートでは、高い満足度が感じられた。一番の理由は、『化粧品学』の内容をふんだんに取り入れたことだろう。「この講義でしか聴けない話が聴けて、大満足だった」というコメントが記憶に残っている。

筆者は、界面化学者である。大学の組織改編以前は、材料系の学科に所属し、界面化学の中でも機能性薄膜の研究を主体としていた。

た。改組後は化学系の学科に転籍したため、そこで学生さんの意見を改めて聞いてみた。どんな研究がしたいか？どんな講義を聞いてみたいか？結果、これまでの機能性薄膜の研究や学習に関しての要望はむしろ少数派だった。一方で、界面化学分野ならば化粧品の化学について話を聞きたい、研究に携わりたい……という意見に熱意を感じた。そこで、郷に入っては郷に従え……とばかりに、教育研究の課題設定を化粧品学方面に大きくかじを切ることにした。化粧品の研究を始め、研究室の学生さんに当

化粧品を「化学」する

藤森厚裕 准教授



該のテーマを提案し、成果を学会で発表させ、図参照、国際誌に学術論文を掲載させた。化粧品会社の研究助成金課題に採択され、他の化粧品会社さんとも共同研究が開始された。

他大学を見てみると、首都圏近郊の国立大では、化粧品学の講義や研究を行うところはほぼ見当たらない。逆に私立大学では、いち早く受験生さんの思考性に目をつけ、化粧品学講座を立ち上げた大学が複数見つかる。「国立大で学べる化粧品の化学」というのは、受験生さんによくPRできるかも知れない。試験的に、今年のオー

ブンキャンパスの際、集まっていた一般の方に紹介を行ってみたい。興味深かったのは、受験生さんのお母さま方の反響が高かったことだ。積極的に質問をいただき、大学の理工系で学ぶことが身近なお化粧品の開発にもつながることを、ご理解いただけたかもしれない。いかがでしょうか？読者のお母さま、お子さまを当学で学ばせ、将来の化粧品開発者としての道を歩ませるのは？

ただし、「化粧品化学」という言葉は造語に近く、そのような学問分野や講義はほぼ存在していない。産業的な応用を意識した表現

ふじもり・あつひろ 1974年生まれ。2002年3月埼玉大学大学院博士後期課程物質科学専攻修了。博士(理学)。日本学術振興会特別研究員(埼玉大学)、山形大学大学院理工学研究科助教を経て、2011年4月より現職。専門は超薄分子組織膜の化学、高分子複合材料。

で、多くの国立大で前面に押し出されていないのは、学問の本質を見失わせないためだろう。化学を化粧品に使う、あるいは化粧品を「化学」するための学びが重要なのだと思う。この考え方をぜひ、今後の学生さんたちに教示していきたいと考えている。

ナノ粒子積層体による構造色の発現一色材、化粧品分野における新素材開発への期待



本研究 有機物層無機ナノ粒子の多層膜形式による構造色の発現 ナノ粒子層の構造と発色挙動の相関の解明の検討

筆者の研究室の学生の、研究発表シートの一例。化粧品への応用をよく意識した構成としている